

Title	マックス・シェイラア教授逝く
Sub Title	
Author	新館, 正國(Niidate, Masakuni)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1928
Jtitle	哲學 No.4 (1928. 8) ,p.235- 275
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000004-0235">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000004-0235</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# マックス・シェイラー教授逝く

新 館 正 國

\*  
\*\*

頃日マックス・シェイラー教授の訃報——本年五月中旬頃逝去の由——が海を越えて傳へられた。

死は常に脚下に開ける深淵である。其の緘黙じんもくの裡に我等が辛じて語り得る言葉は、唯だ冥福を祈る悲しみの蔭にさゝやかれた追憶の断片に過ぎない。——

\*  
\*\*

故マックス・フェルディナンド・シェイラー教授は (Max Ferd. Scheler, Dr. Philos., o. ö. Prof. d. Philos. u. Soziol. Univ. Köln, Dir. a. Forschungsinst. f. Sozialwiss. Köln.) 七一八七四年八

マックス・シェイラー教授逝く

月二十二日、ミュンヘンに生れた。生家は地主を業とし、父をゴットリイプ、母をフェルターと呼んで、舊教徒であつた。其の家柄は、五世の祖に國務大臣にして且つリュッケルト全集の編輯者たりしエルンスト・シェイラーを出だした程の名家である。

教授は少年の日をミュンヘンのギムナジウムに過ごし、其の課程を卒えると、ミュンヘン、ベルリン、ハイデルベルヒ、イエナの諸大學を順次に遍歴して、哲學を修めた。當時ミュンヘン大學に於いてはリップス、ベルリン大學に於いてはディルタイ、ハイデルベルヒ大學に於いてはクウノウ、フイッシャア、イエナ大學に於いてはオイケン等の諸大家が講壇に立つて居た。是の大學放浪は、終生直接な生命感と宏遠な反省心との間をさまよつた教授の最初の魂ひの巡禮であり、終ひにオイケンの精神論 (Noologie) に到つて教授は、其の多端なりし學問的生涯の黎明を迎えたのであつた。

\*  
\*\*

一八九九年シェイラー教授はイエナに於いてルドルフ・オイケンのもとに「論理の原理と倫理の原理との關係」(Beziehung log. u. eth. Prinzip.)なる論文を呈出して學位を

授與され、次いで一九〇二年には同じくイェナに於て處女著「先驗的方法と心理學的方法」(Die transszendentale und die Psychologische Methode, Eine grundsätzliche Erörterung zur philosophischen Methodik, 2. Auflage, 1922.)を發表して大學講師の資格を得た。

この「先驗的方法と心理學的方法」に於いて、我等は教授の望み多き潑刺たる學問的誕生に行き遇ふのである。將來の唯一の形而上學を約束するオイケンの見解——精神生活を以て現實そのものの眞の形而上學的本質の現れと觀る師の教へは、教授をして夫の實在を單なる豫想としてひたすら價值批判にのみ没頭する純粹な理想主義の哲學者、又は實在を自己省察に於いて科學的に認識され得る「心的事實」の裡に幽閉する現實的理想主義の哲學者に對して、彼等の説く諸々の原理をも又廣く時代の生命をも支える實在そのものの困難な探求に敢然と向ふ純粹な現實主義の哲學者たらしめると共に、斯く實在を我の内にはたらく限りに於いて認識する哲學が基礎付くべき本質直觀に對する師オイケンの不充分なる分析を、教授は前述の諸哲學者に於ける先驗的方法及び心理學的方法の批判に據つて徹底深化せしめんと試みたのであつた。曰く「價值にして現實に妥當せざる限り、其

れは思惟すべからざるものである。又、凡ゆる内容は、其の存在に於いて一の不可分なる統一態に結合されんことを要求する。斯くて精神的なる生命形式は、心的事實の發展に於ける所産としては把捉し能はぬものである。更に曰く「眞に、精神的なる能<sup>ア、テ</sup>作は單に、實行され得るのみであり、觀察も體驗もされ得るものではない。而して其れが與へるところのものは、存在と價值要求とを、不可分に結合するのである」と。然し師オイケンの基礎的確信——「全體的、内面的、本質的なる根本生命は人間生活に於いては世界史的に現はるゝ精神生活である。精神生活は宇宙の本質たると共に人間の眞の自己であり、其の實現は人間生活に由るの他なく、其れも個々人の生活を越えた歴史的な生活によらねばならぬ」——に到つては、教授の亦終生固執せる確信であり、後年エドムンド・フッサールの「論理研究」は、斯る立場の補全として教授に強き影響を與へたのであつた。「先驗的方法と心理學的方法」は教授が未だフッサールの影響を蒙らざる時代の著作であり且つ僅々二百頁を出でざる小著であり乍ら、一面に於いては教授が後に認識論的、倫理的、宗教哲學的、殊に歴史哲學的著作に於いて展開した思想の萌芽を多數に包含し、他面に於いては獨逸哲學の現

代に於ける進程の上に多大の影響を及ぼせる點に於いて教授の著書中特に注目するべきものの一つである。

註 本誌第一輯所載川合先生の論作「Transszendentale Methode」中に「先驗方法と心理學的方法」中の先驗的方法に對する批評と其れに對する先生の御見解とが述べられて在る。

猶ほシェイラー教授の哲學の認識論的理解に興味をつなぐ人々にして、「先驗的方法と心理學的方法」の讀後、更に著者の哲學の問題竝に目的に對する根本見解發展の概容を覗はうと欲するなれば、同書と後期の論文「哲學の本質」(„Vom Wesen der Philosophie,“ enthalten in 1 Band des Buches „Vom Ewigen im Menschen.“)とを並讀比較せねばならぬ。而して特に「先驗的方法と心理學的方法」に於ける思想内容を其の卷末に一括せる十二のテーゼの内の第一、即ち哲學の出發根據たるべき「確實にして自ら明證を有する史料」に關する見解が、後に著者に由つて棄却された經過を知る爲めには、同じく後期の論文「現代の獨逸哲學」が(„Die deutsche Philosophie der Gegenwart,“ herausgegeben von Ph. Wiskopp Berlin 1922, Volksverband der Bücherfreunde S. 196 ff.)が纏かるべきであらう。其處に著者は、彼がフッサルの「範疇」(カテゴリー)の概念に追蹊して、是の所謂「明證問題」に對する彼独自の立場に如何にして到達したかを簡明に物語つて居るのである。

\*  
\*\*

一九〇七年シェイラー教授は故郷ミュンヘンの大學に於いて哲學の私講師に就任したのであるが、その職に在ること三年、一九一〇年には辭してベルリンへ居を移し、一九一二年十二月二十八日ミュンヘンのアドルフ・フルトヴェングラー教授の愛嬢メリス・エディトと結婚した。この結婚は後に一子ヴォルフガングを教授に授けたのである。

ベルリン移轉後、教授は愈々眞に精神的なる活動に入つた。教授にとつて哲學は一つの「望樓」である。眞の哲學者は、彼等に能ふる限り登りつめた望樓から脚下に渦巻く生活の激動の裡に ewigen Sachproblemen der Philosophie を看破して、是れと戦ふべきである。曰く「哲學は體系的であらねばならぬ。然り、一の「體系」を見えて在らねばならぬ。けれどもこの體系は少數の單純な根本原理の演繹に基くものには非らず、實在又は精神生活の多様な領域に滲透する分析に由つて絶えず其の營養と眞價とを新たに獲得するものであり、又何等の終局をも有せず、絶えず生命

に於て或は生命を通じて新たなる合思想的探求に成長する體系であると。されば根本生命即ち世界史的に現はれる精神生活はシェイラー哲學の故郷であり、教授は其處に、絶えず人間に於ける眞に人間的なるもの、即ち其れに據つて人間が人間を限りなく超える可能性を求めたのであつた。既に「先驗的方法と心理學的方法」に於いて教授は成長すべき望樓を築いた。今や二十世紀の初頭を粉碎した世界史的激動の中心ベルリンが、教授の生活の地となつたのである。

\*  
\*\*

一九一二年から大戰勃發の一四年の春にかけて教授は後(一九一五年)に「價值の顛倒」二卷 (Vom Umsturz der Werte, der Abhandlungen und Aufsätze. II. Bände. 1 Auflage, 1915. 2 Auflage, 1919. 3 Auflage, 1923.) に集成した諸論文を學術雜誌に月刊雜誌に發表した。いま是れ等の論文の標題を「價值の顛倒」の目次に由つて擧げれば次の如くである—— I. Band: 1. Zur Rehabilitierung der Tugend / 2. Das Ressentimentim Aufbau der Moralen / 3. Zum Phänomenen des Tragischen / 4. Zur Idee des Menschen. II. Band: 1.



Die Idole der Selbsterkenntnis / 2. Versuche einer Philosophie des Lebens / 3. Die Psychologie der sogenannten Renten hysterie und der rechte Kampf gegen Übel / 4. Zum Sinn der Frauenbewegung / 5. Der Bourgeois und die religiösen Mächte / 6. Die Zukunft des Kapitalismus.

既に述べたやうに若しも「先驗的方法と心理學的方法」が教授の最初の基本的な哲學方法論であり、即ち成長すべき最初の望樓であつたとするならば、この「價値の顛倒」に於ける諸論文は、眞髓に於いて生命の哲學者、特に文化批評家、道德批評家たりし教授の最初の眞實なる哲學論であり、即ち増大すべき最初の視野であつたと云ふべきであらう。彼處に於いてフッサル學徒たるべき教授を見た我等は、此處に更に「カトリックのニイチエ」(Katholischen Nitszche)としての教授を見るのである。大戦前のブルジョア的資本主義的時代の世界觀竝に道德は、此處に、騒然たる現實事象の行程に於いてではなく、無音の本質的な過程に於いて基督教及び基督教會の精神に由つて導かるゝ生命秩序、世界秩序に轉向純化せらるゝものとして多面的且つ深刻に描破されて居る。洵に教授にとつてオイケン哲學は、其の形式に於いてフッサル哲學の補全を必要と爲したが如く、其の内容に於ては教父アウグスティ

ンの De civitate Dei の新生が夢みられたのである。夫れ故、シェイラー教授の哲學論を其の核心に就いて觀るなれば、アウグスティニスムを其れの時代的被覆から解放して、現象論的思考方法に由つて新たに更に一層深く基礎づけんとするものとも云はれ得るであらう。如何に紛糾せる文化現象と雖も、全て新たな象徴として示現する精神と神との直接の接觸である。斯る接觸に對して單なる「還俗せる一種のカトリシスム」に墜ちるごとく是れを窮局妥當的に解明し得るの道が我等に果して許され得るであらうか。次に少しく永きに失する引用を犯してシェイラー教授自らに是れを語らしめてみよう。

\*  
\*\*

曰く——「正當に理解するなれば哲學の凡ゆる中心問題は次の問題に歸するを得る。人間とは何ぞや。彼が實在世界神なる全體に對して占むる形而上學的位位置並に状態は如何。疑ひもなく古代思想家の傳統は、全に於ける人間の位置「即ち人間」なる本質と其の存在との形而上學的位位置規定を以て凡ゆる哲學的問題設定

の出發點たらしめたのであつた。又パスカルの *Pensées* も凡ゆる哲學問題を絶えずこの點に基いて規定し、マルブランシMalbrancheも其の *Recherches de la vérité* を斯る形而上學的位位置規定を以て始めて居るのである。

然るに今日多くの人々は、斯くの如き問題は既に「古びたるもの」或は現代の知識生活とは兩立し難きものと感じて居る。是れは、彼等が到る處に包まれて居る寓話的神話的なる被覆を更に彼等自身が事實に對して執る時に、さう感ぜられるのであつて、斯る被覆の背後に突き進んだ時にさう感ぜられるのではない。現代の哲學は其の全面に於いて正しく斯る問題の事實内容に充たされて居る。心理學主義と人性論主義との争闘は、一面に於いて批判的先驗哲學に於いて、他面に於いて現象論哲學に於いて絶へず次の問題に環り行くのである——論理的、倫理的、美的原理竝に原則は人間性の状態に「關聯し」或は「關聯せず」して、如何にして其の眞理性と妥當性とを獲得するのであるか。又如何なる範圍に其れ等を所有するのであるか。フッサールの「論理研究」第一卷は、從來の論理學に於ける、人性論主義に對して極めて犀利なる批評を浴びせて居る。即ち、從來の論理學に於ては論理法則が理

念的なる本質法則たらしめられる代りに、單なる「人間思惟」の機能法則たらしめられて居るのであり、是の法則は人間なる類の存在と状態とからは全く獨立に「對象」そのものの本質に基づくとせられて居るのである。

上述の問題概念からして、次に其の内容と其の統一の性質とを「人間」の理念に歸すべき第二の問題概念が、歴史と自然史との境界に於いて發生し來たるのである。

前世紀を通じて猶ほ次の如き誤想が行はれて居た——「歴史」と「自然史」との間には、其れ等の認識に於ける假定的事實に關して一の嚴密なる連續性若しくは次序的差別が在る——と。然るに歴史は出典、文書、記念物に據る認識の原理、換言すれば有意味なる紀號の媒介に據る理解的認識の原理に基づくのであり、所謂「自然史」は「自然法則」の根據に立つて現在に知られ得る事實竝に過程よりして自然の「從つて又人間の」原始状態を構成し、又是の状態を以て逆に夫の現在に知られ得る事實状態の假定的原因と見做すのである。又事實上「自然人」又は其れを假定として構成された先史から歴史上の「人間」に至る道には何等の小徑すら見出し得ないのである。歴史上の「人間」は、意味の法則又は理解の法則の根據に立つて始めて理解さ

れ得るのであり、其の過去を我等は出典、文書、記念物を通じて、凡ゆる「因果推論」からは獨立に、直接に見るを得るのである。従つて所謂「人間の自然状態から文化状態へ」の過渡に關する凡ゆる問題、即ち國家、言語、法律等の所謂成立問題は、若しも其れ等に歴史的解釋を施さうとすれば、虚妄を以て答えられるの他はない。凡て此の種の問題は、歴史的のものには非ずして、形而上學的の觀察對象なのである。歴史的に人間の「自然状態」を示めさうとする學説は、全く夫々の時代の關心に出でたる恣意的形像であり、何ものをも「解明せずして、却つて其れ自體が歴史的に心理學的に解明せらるべきものである。」——と。

\*  
\*\*

斯くして我等はシェイラ教授を以て、直ちに笑ふべき辨神論(Theodizee)の使徒として、單に歴史の經過に感謝と禮讚を捧ぐる者とのみ思つてはならぬ。教授は凡ゆる人間に對する「普遍妥當性」の理念に於て、絶對的なる事實一致の理念(嚴密なる意味に於ける「真理」若しくは意志目的の價值一致の理念(嚴密なる意味に於ける「善」)

高唱し、人格的形式に據る以外の認識例へば科學の認識の如きを全て相對的であると爲した。「人格的」とは「主觀的」と同意義に非らずして、寧ろ、最大の超規範的なる客觀的」と解すべきであり、Welttotalitätは獨り認識の人格的形式に由つてのみ興え得るのである。是れは眞に普遍妥當なる生命、價值又は目的の具顯であり、其處に在つて科學は眼に見ゆる世界又は生命の現實界を世界支配の目的豫見する爲めに見る。又は、知は力なり)の下に取捨選擇するのである。されば、人々は單に相對的なる眞又は善を以て普遍妥當なりとし却つて絕對的なる眞又は善を普遍妥當ならざる人格的、個人的眞又は善と爲すの謬見を捨てねばならぬ。嚴密なる意味に於ける眞理竝に善は、眞の、普遍妥當性に非らざる單なる、普遍妥當性の限界内に於ては、精神的上層建築として打ち建てられねばならぬのである。而して斯る精神的上層建築の基石が、神の豫見的の知と結合せられた意志(アウグスティン)に在ると云ふことは、少しく自由の眞義に對して思索を加へた人ならば等しく是れを是認し得るであらう。我等の努力は一に掛つて、この意志の解釋竝にその發現分野の廣狹深淺に在るのであり、斯る努力は世界若しくは意識の意味と作用に

對する最高の理解公理を確立して、我等に文化發展の理想的可能性を知らしめるのである。

\*  
\*\*

上述の寸言に由つて「價值の顛倒」二卷に收められた諸論文の性質が微か乍らにも讀者の念頭に浮び來らば幸ひである。其處に展開せられる社會、文化、道德、歴史、人間性の諸形像は、何等「上」から構成せられたものではなくして、夫々の本質から迸出せるものであり、讀者は是れ等の諸形像に於て著者の思想と世界と人格との眞の統一態を見るべきである。其の混沌として多岐錯綜を極めたる世界に著者が豫言者の熱情を以て其の銳利なる思想を縦横に驅使せる狀は洵に現代哲學の最も光彩ある一點景と云ふを妨げぬであらう。

\*  
\*\*

「價值の顛倒」の論文と並行して、シェイラー教授は一九一三年には「同情の現象學と理

論(Zur Phänomenologie und Theorie der Sympathiegefühl und von Liebe und Hatz)を發表し、一九一三年から一五年に亘つては「年報」(Jahrbuch für Philosophie und Phänomenologische Forschung,“ herausgegeben von Edmund Husserl im Gemeinschaft mit Moritz Geiger, Alexander Pfänder, Adolf Reinach, Max Scheler, Band I, Teil 2 und Band II)誌上に名篇倫理學に於ける形式主義と實質的價值倫理學」(Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik, neuer Versuch der Grundlegung eines ethischen Personalismus.)を連載したのであつた。

「同情の現象學と理論」は、文化の凡ゆる現實態を規定する内的生命の意味把握を志した、教授の人性論研究に對する第一作である。我等の感情生活に於ける諸現象は、此處に其の最も纖細なる隅々に到る迄普ねく本質直觀的に照破されて、意味關聯を爲し以て我等の生活事實が單に悟性のみならず感情に由つても亦總括せらるべきを教へて居るのである。かつてカイゼルリンクはシェイラー教授を哲學界に於けるリストであると評した。リストは其の着想の豊かさ、に於てヴァグナーに勝り、其の理解の深さに於てヴェルディ等を抜く。同様にシェイラー教授も亦多面的なグル



ンドモウチーフを内に湛えた着想の大家であると云ふのである。是の意味に於けるシェイラー教授の面目を最も赤裸々に物語るものは本書であると云ひ得るであらう。本書は既に其の第一版に於て、當時の獨逸思想界への強大な影響の故に「精神的勞作」と云はれてゐたが、一九二三年其の第二版の發行に於いては範圍は倍加され内容は一層廣大なる關聯に包攝されて書名も「同情の本質と形式」(Wesen und Formen der Sympathie, Der „Sinngesetze des emotionalen Lebens“ erster Band.)と改められた。この改訂が何等原理上構想上の改變を意味するものではなく「視野の成長」に結果したのであることは云ふ迄もない。

\*  
\*\*

倫理學は現象論に由つて本質的に新たなる生面を打開すべきであつた。この興味在る課題に對して最初の任務を果したものが、シェイラー教授の「倫理學に於ける形式主義と實質的價值倫理學」の一篇である。其處に教授は、カント流の形式主義的倫理學の徹底的批判を通じて、現象論的倫理學(實質的價值倫理學)の緒論を描い

て居るのである。されば是の一篇は、單にシェイラー教授の學說發展に對してのみならず、寧ろ又廣く現代倫理學の進程に對して顯著なる價值を有するものと云はれ得る。實にニコライ・ハルトマンをして倫理學の問題を正視せしめたのも、此處に現はれたシェイラー教授の功績であつた。

シェイラー教授に依れば、カントに於ける根本的謬妄は一面に於いて「先天的者」と「形式的者」との同一視であり、他面に於いては、幸福論 (Eudamionism) と實質的價值倫理學との混同であつたのである。教授にとつて先天性は本質先天性であり、倫理學は自體セルブスト・ゲゲン・ヘイット所與に對する直接觀照に由つて到達せられる實質的價值階相を確立すべきである。

我等が善と云ひ惡と云ふのは、何に就いてであるか。意志、行動、個人に就いてであらうか。是れ等は時間的に存在する諸對象であるが故に眞であり偽であることを得ぬと同様に又善であり惡であることも出來ぬのである。善惡の對象は、是れ等と結び付き而も全く別種の對象即ち價值でなければならぬ。善惡は價值の一部を形成する倫理的若しくは道德的價值の表現であり例へば謙讓、慈悲、正義、純

眞、柔和、寛大、誠實、愛、犠牲心、竝に其の反對たる傲慢、無慈悲等の諸價值が倫理學本來の問題圈を充たすのである。然し乍ら斯くの如き倫理的諸價值の事實ツァイタルとしての存在ザインは、他の諸價值竝に對象一般の其れと同様に何等證明することは出来ぬ。誰れかベエトウフンのゾナタの美しさを證明し得ようか、ピアノの前に坐りゾナタを弾いて此處彼處に注意することは出来ようが。其の美しさを證明することは不可能である。價值は觀照シヤウケンせられ得るのみである。而も倫理的價值は、論理的價值とは反對に、直接に觀照されるのであり、是の差異は兩者の構造に基くのである。蓋し論理的價值が志インテンテイオナアル向的なる對象を有するに反して、倫理的價值は何等の對象を有せず従つて志向的ではないからであり、又論理的價值の志向的表現性の故に認識には眞偽を峻別する基準が必要であるに反して倫理的價值は斯る性質を有せず従つて肯定的乃至否定的倫理價值を決定すべき何等の基準をも必要とせぬからである。然し斯く倫理的價值が直接に明白に觀照せられねばならぬと云ふことは、倫理的價值が人間の行動に於いて特定の意味を表現し或は實現すると云ふことと何等矛盾するものではない。人間の行動が倫理的價值の觀照者をして

其の觀照に入らしめ得るのである。此處に於て價值觀照に於ける二様の前提が注意せられねばならぬ。即ち價值觀照の一般的前提は、我等が現實在の形式の王國に着目して居ると云ふ事であり、特殊的即ち倫理的、竝に宗教的(價值觀照の前提は、我等に於ける畏敬の念(Ehrfurcht)である。されば、畏敬の念を有する人々のみが、人間の行動に於いて倫理的價值を觀照し得るのである。

斯くしてシェイラ教授は云ふ。「本來の價值の中心は人格(Person)である」と。此處に人格とは、何等肉體的、又は靈的、或は精神物理的のものには非らずして、自我と價值なる精神王國との接觸に由來するものである。我等の自我が是の王國に入り來る以前は、一切が單に自然的なる事象に過ぎぬ。是の王國との接觸に據つて始めて自我は謂はば第二の一層高き新生命に生長し——變化、改造、變形する。即ち、其處には是の接觸なくしては起り得ざることが惹き起されるのであり、價值の王國は自我を通じて時間性の裡に降臨するのである。斯くて自我は一層高き形式に擴大して人格と成り、人格が此處に超時間的なる精神的能作を指定するに到るのである。

\*  
\*\*

以上の概説は固より杜撰極まるものである。されど猶ほ其處に新鮮なる倫理的思惟の閃光が覆ひ難く感知されはすまいか。いま試みに畏敬、人格に二概念を執つて、カントに於ける其れ等と比較して見よ。其處に浮び來たるものは、我等の恣意的批評を妄りに刺し挟み得るが如きアンチポードの對立ではない。カントの偉才、純情が照破した事實の本質に對する、一層確然たる照破である。斯くの如き照破、徹底はシェイラー教授の叙述の到る處に躍動して居るのである。洵に教授の思想に於ける新鮮味は、常に古くして新たらしきもの、ヘゲルの用語例に倣らつて是れを云へば、*ein für sich bestehendes, durch sich selbst berechtigtes Ganzes* であると云ひ得るであらう。斯る思想の交錯に由つて實質的價值倫理學の城門はいまや時代の空高くうちたてられた。將來の倫理學者は、假令シェイラー教授の見解に異論を持つ者と雖も、必ず一度はこの城門を仰ぎ見ねばならぬのであらう。實質的價值倫理學の創設者としてもシェイラー教授の名は不朽である。

猶ほ翻つて又この「倫理學に於ける形式主義と實質的價值倫理學」一篇の、シェイラー教授の學說發展に對する意味を求めらば、是れは「價值の顛倒」に於ける多様な諸論文の方法論的根據を示すものである。是の根據に立つて見る時は、其處に現はれた幾多の文化批評、道德批評が價值の積極的次序を獲得せんとする努力であつたことが解るであらう。斯くの如き價值の積極的次序が、世界の意味と作用に對する最高の理解公理であり、而して是れが——是れのみが、我等に文化發展の理想的可能性を示し得るのである。

\*  
\*\*

歐洲大戰は、シェイラー教授四十歳代の前半期を、異狀な活動に入らしめた。「さらびやかなブロント色の猛獸」が彷徨する歐羅巴の天地は、教授にとつて權力政治時代（是れの現實性竝に本質精神の淵源は封建時代に在る）のトーテンタンツの亂舞場であつた。其處に何人もが豫感すべき轉向を、教授が如何に豊富に如何に深刻に感得したか。寸時も休みなき健筆を驅つて、教授は是れを「戦争の守神と獨逸戦争」

(Der Genius des Krieges und der deutsche Krieg, 1915, Dritte neu durchgesehene Auflage, 5-6. Tausend, 1917.)「戦争と再建」(Krieg und Aufbau, 1916.)「獨逸憎惡の原因」(Die Ursachen des Deutschen Hasses, Ein nationalpädagogische Erörterung, 1919.)の三著に物語つて居るのである。而して是れ等の著書を、教授の體系發展の徑路に持ち來たして見るならば、是れ等は疑ひもなく「價値の顛倒」に於ける諸論文の續篇であり、是れ等に於いて教授が歐洲大戰に由つて毫も其の根本的確信を歪曲せられることなく却つて其れを大戰に由つて愈々増大せる視野の裡に活躍雄飛せしめてゐることを我等は覗ひ得るのである。教授が戦前の歐羅巴に對して感得した其の眞の存在形式が、時代精神の蔭に、而も徐々に新たなる時代精神を形造りつつある戦時の道德世界を通じて猶ほ同一に而も極めて有力に維持されてゐると爲す確信は、戦争の守神と獨逸戦争」一篇の構想の中心であり、斯る價値顛倒の過程に於ける基督教精神並に基督教會の無力に對して既に剔出された多様な原因は「戦争と再建」に於て一層徹底的に討究せられて、其の救濟の道が形而上學、人性論、社會學の確立に求められて居るのである。

註

一九二二年「戦争と再建」の第二版出版に當つて、シェイラー教授は、本書に含まれる初版出版當時の時事問題に關係なき、従つて無時間的なる眞理問題、認識問題に關係する諸論文のみを、更に一部は諸雜誌に公表され又一部は未發表の諸論文と總括して、「社會學と世界觀學」(Schriften Zur Soziologie und Weltanschauungslehre)なる書名の下に出版しようとした。本書は教授の計畫に據れば四卷に分かれたれ、I. Bd. „Moralia,“ II. Bd. „Nation,“ III. Bd. „Religion und Christentum,“ IV. Bd. „Philosophie der Geschichte“となるのであるが、今日迄に公刊せられてゐるのは、次の三卷四冊である。

1. Band: *Moralia*. 1922.

2. Band: *Nation und Weltanschauung*. 1923.

3. Band: *Christentum und Gesellschaft*.

1. Halbband: *Konfessionen*. 1923.

2. Halbband: *Arbeits- und Bevölkerungsprobleme*. 1924.

本書第一卷の冒頭に述べられたシェイラー教授の世界觀學に關する概念は、全篇の緒論たると共に、多面的に交錯せる教授の全哲學論に對する方法論的基礎を簡潔に現はしめるものとして特に注目せらるべきであらう。勿論いま其の詳細に立ち入ることは許されないが、未知の讀者の注意を喚起する爲め其の結論のみを簡單に示せば、次の如くである——世界觀學に窮局の目標と問題を示し得るものは、措定せられた世界觀である。是の關係は宗教の教義又は歴史に對する神學の關係

マックス・シェイラー教授逝く



と同一である。斯くして構成的世界観學は次の四の主要部分に分たられる。第一は、本質上可能なる世界観一般竝に是の可能的世界観に於ける部分又は肢體間の本質關聯に關する理論であり、是れは世界形式意識形式の本質現象學に直接に結び付いた哲學論である。第二は實證的にして而も純粹に「意味記述的なる世界観學」である。是れはデイルタイ、ジムメル、イヤスパー等の其れに於けるが如き何等かの「心理學」に依據するものではなく、全く理想的客觀的なる意味内容(例へば事實としての宗教、哲學體系、法律等の如き)を問題とし、而も其の生成史には立ち入ることのない研究である。第三は主觀的理解の世界観學である。是れは理想類型の精神的能作關聯に従ひ、是れを發展せしむるものである。第四は世界觀を現實的因果的に解明する人類學、社會學、心理學である。是れは世界觀自體の意味内容を解明し得るものではなくして、世界觀の現實的決定性の研究である。——と。

而して「獨逸憎惡の原因」は、文化批評家としてのシェイラ教授が如何に卓越せる直接の價值觀照家であるかを如實に精細に示すと同時に、教授が其處に剔出せられたる「諸原因」を現代文化發展の關聯裡に吸收して一々その位置を決定せる側面より見るならば、宛然世界史を背景として描かれたる獨逸精神史或は性格史のスケッチたるかの觀を呈してゐるのである。

\*  
\*\*

以上の如き大戦の現實に面接した純精神的活躍の側らシェイラー教授は大戦後半の二箇年間に、大戦の現實そのものの裡に進み入つて祖國、延いては祖國を通じて全歐羅巴の爲めに心身を捧げた。即ち一九一七年教授は外務省の特別使命を帯びて瑞西のゲンフに、一九一八年には和蘭の Haag に駐在して、平和促進の爲めに奔命したのであつた。

\*  
\*\*

斯くて大戦果てて一九一九年シェイラー教授は、當時新設のケルン大學に招かれて、哲學並に社會學の正教授に就任し、同時にケルン社會科學研究會 (Kölner Forschungs-institut für Sozialwissenschaften) の理事に推された。世界が戦後の清算期に入ると同時に、教授も亦極度に擴大せる「視野」の清算期を、ライン河畔のゴチック會堂下に迎えたのであつた。既に望樓は評價の聲喧ひすしき市場の熱鬧を超えて高く、視野

は第二十世紀前半紀に於ける舊文化の廢趾を隅なく捉えて居る。果せる哉、一九二一年には大著「人間に於ける永遠なるもの」の第一卷「宗教的再興」(Vom Ewigen im Menschen, I. Band: Religiöse Erneuerung.)が、是の清算期冒頭の快著として世に問はれたのであつた。

\*  
\*\*

「人間に於ける永遠なるもの」の緒言の裡に、シェイラー教授は次のやうに云つてゐる

「……著者は彼の精神的閃光を時代の潮流と泡沫とを超えて一層純粹な雰圍氣の裡にわけ入らしめ、以て人間に於ける最も人間的なるもの、即ち彼が據つて以て永遠の内に參入するものを捉えることにひたすら努めて來た。永遠の内に驚異と幸福とを感じつつ憩ひ、自餘の生活を凡べて是の高き目標に到る紛糾せる小徑と觀じ得る天福は、洵に少數の者のみが克く享受し得るところに過ぎぬであらう。著者は斯る少數者と共に、時代の奥底に病み惱める永遠の「新生命」(Vita nuova)が再

び現はれ來たるであらうことを示して、時代の要求を満足せしめたいと思ふ。

「永遠」の純粹な概念は、時の流れに逆らうものの裡にも在らず、又個人の永生を願ふかほそき永遠性の囁きの裡にも宿つては居ない。眞の永遠は時を出でゆくのもなければ、時と並らび立つものでもなく——時なき時に豊かなる内容を湛え、又其れ等を以て時代々々の凡ゆる人々の視野を貫くものである。

されば、永遠なるものは、最早や生命と歴史とに堪え得られなくなつた人々の逃避する救護所たるものではない。歴史から逃避して永遠なるものの理念に匿れる者は、單なる「精靈家」に過ぎぬであらう。然るに今日多くの青年達は斯る逃避傾向に沈んで居る。或る者は超歴史的なる天上の音樂に逃がれ、或る者は歴史の蔭イウバアヒストリツシに風景、花、星等の牧歌を歌ひ又喜び知らぬ人々は、永遠の光なき歴史ウシダアヒストリツシ下の泥沼に快樂を追つて居る。斯る諸傾向は、假令無理からぬこととは云へ、著者は其れ等に何等の希望も置かうと思はぬ。歴史は、彼等が逃避するよりも、寧ろ歴史の牢固たる實在性に食ひ入つて、其處に永遠なるものの泉を見出し、飲むことが一層彼等に房はしきことを教へるであらう。——と。

以て本書の發表に掛けられた教授の意圖と希望とが、如何に博大且つ熾烈であつたかが偲ばれ得るであらう。

\*  
\*\*

「人間に於ける永遠なるもの」は、教授の計畫に従へば、全三卷を以て構成せられ、其の第一卷が現に我等が其の書名の下に有する唯一の書「宗教的再興」である。

本書は、其の内容に由つて見れば、教授の哲學論の中心生命たる倫理學的竝に特に宗教哲學的の問題を對象として居り、又其れを教授の學說發展の行程に持ち來たして見れば、夫の「倫理學に於ける形式主義と實質的價值倫理學」に於いて與えられた根本思想の徹底であり、特定の事實範域に對する適用である。されば、この茫大七百餘頁中に説かれた所論は、シェイラー教授の世界形式、意識形式に對する本質現象學の緒論であり、教授に由つて指定せられた世界觀の根底である。其處に教授の多面的にして透徹せる文化史的考察を通じて描かれた人間に於ける永遠なるもの、神的なるものの本質經驗は、其の到る處に失はれたるアウガスティンの眞理を

再び新たらしく生命との直接關聯に於いて生々と物語つてゐるのである。是れ等を人々は最早や單なる宗教論、單なる倫理論と呼んではならぬ。我等が其處に出逢ふものは單に宗教と云はれ倫理と呼ばれる意識生活、精神生活の一断面のみの研究ではなくして、却つて具體的なる人間の研究、人間の存在に關する學問である。而して具體的なる人間の存在に對する研究は、必然的に存在に於ける眞の「存在の仕方」へと向はねばならぬであらう。宗教的價值、倫理的價值はシュイラー教授にとつて人間の存在に於ける眞の「存在の仕方」であつた。換言すればシュイラー教授に於ける宗教的價值又は倫理的價值は、人間の存在の特殊なる存在論的規定、或は是の存在の優れた意味に於ける存在の仕方そのものの概念である。従つて此處に取扱はれる人間の宗教、道德、文化は、對象ではなくして存在である。而も人間に於ける何等理念的なる存在ではなくして、人間の絶對に具體的なる現實である。是の意味に於いて本書は、シュイラー教授の凡ゆる精神科學的、文化科學的研究の基礎たるべきアントロポロギイの序論であるとも云ひ得るであらう。而して若しも哲學が自餘の諸科學と異なり、我等が自覺的に生活する上に必須のものたることを其

の第一の特性となすなれば斯くの如きアントロポロギイこそ最も哲學的なる哲學、眞の哲學と呼ばれ得るではなからうか。

註 猶ほ「人間に於ける永遠なるもの」の未刊の第二巻第三巻に就いては、「宗教的再興」の序文の裡に次の如く語られてゐる——

Der zweite Band wird zum Hauptstück eine Abhandlung geben, die bestimmt ist, die Ethik des Verfassers zur vervollständigen. Sie soll die Bedeutung erwägen, die das persönliche Vorbild in allen seinen Abarten für das moralische und religiöse Sein der Menschen und für die geschichtlichen Veränderungen der Ethosformen besitzt. Der dritte Band wird vor allem das Verhältnis von Liebe und Erkenntnis (die historischen Typen der Lehren von diesem Verhältnis sind vom Verfasser in einer älteren Abhandlung verfolgt worden) rein sachlich und systematisch behandeln und soll ein letztes Fundament geben für eine »Soziologie des Erkennens«, die der Verfasser später systematisch vorzulegen beabsichtigt.

\*  
\*\*

斯くて「人間に於ける永遠なるもの」に於いて、シェイラー教授は、眞正の意味に於ける生命の哲學者、文化の哲學者としての自己の「精神的なる」能作を清算的に體系的に語り始めたのであつた。其の充たさるべき構想の概容を、教授が遺した著書に於

て知られ得る限りに「視えば、アントロポロギイを根底とした社會學、歴史哲學形而上學の展開に在つたもののやうである。未だ「人間に於ける永遠なるもの」の第二、三卷が出でざるに先立つて、一九二六年社會學的形而上學的勞作たる「知識形式と社會」(Die Wissensformen und die Gesellschaft)が世に公けにせられたのも、右の構想の發露であつたと見らるべきであらう。

註 「知識形式と社會」の公表前、一九二五年にシェイラ教授は「知の形式と教育」(die Formen des Wissens und die Bildung)なる五十頁に充たざる小著を著した。本書は「知識形式と社會」の緒論乃至は撮要とも云はるべきもので、シェイラ學說發展の跡を辿る者にとつては、「知識形式と社會」の前に一讀せらるべき價值を有する。

\*  
\*\*

「知識形式と社會」の全篇は次の三部から成つて居る。

- 一、 知の社會學の問題 (Probleme der Soziologie des Wissens.)
- 二、 認識と作業 (Erkenntnis und Arbeit.)
- 三、 大學と民衆大學 (Universität und Volkshochschule.)



第一篇の「知の社會學の問題」は、最初一九二四年にケルン社會科學研究會の委屬に應じてシェイラ、教授が自らの名に於いて編輯發行した研究論文集「知の社會學の研究」(Versuche zu einer Soziologie des Wissens, herausgegeben in Auftrag des Forschungsinstituts für Sozialwissenschaften in Köln, von Max Scheler. 1924.)の卷頭に其の主論文として發表せられたものであり、「知識形式と社會」に集録されるに當つては、其れが更に増補改訂せられて居るのである。

社會學の名は、現代に在つて(又恐らく將來に在つても)一般的に承認された何等特定の形像を我等の念頭に浮ばしめない。「社會」は常に規定さるべき多産なカオスである。我等の生命が常に何等かの意味に於いて是のカオスの裡を彷徨する限り、生命思索は必ず是れに面接し、是れを把捉せねばならぬ。「社會的」なる形容詞を以て時代の特相を嘔はるゝ現代に在つては特にこの「作業」は生命思索の顯著にして又困難なる目標の一つを成すものであらう。

然らば、シェイラ、教授が社會學を如何に把捉したのであらうか。

社會學は、教授に従へば、人間の主觀的客觀的生活内容を對象とする。即ち教授

は、人間の生活内容を、體驗、意慾、行動、理解、動反動に於ける人間間に客觀的に存在する繼時的竝に同時的なる結合形式、關係形式に據る事實的決定性（從つて規範的又は理念的、存在當爲的決定性ではない）に基いて、分析的に、記述的に、而して又因果的に究明して、規定、類型、竝に其れ等に於いて可能なる法則を定立するところに社會學の本來の使命を觀るのである。從てシェイラー教授の社會學は、マックス・ウェバーに於けるが如く、何等人間の意味的行爲又は其の意味内容に關與するものではない。斯る人間行爲の意味内容を體系的に純粹に展開するものは、教授にとつてアントロポロギイであり社會學は飽く迄も人間生活内容の事實的決定性の研究であらねばならぬ。然し乍ら人間の生活内容が其の意味的内容に關聯を有することは勿論である。人間の生活内容は、其の意味的内容の顯現であり、其の顯現の仕方が事實的決定性である。是の事實的決定性の研究に於て、教授は先づ人間の生活内容を意味的に精神と衝動、理想と現實なる兩極に切離し、主として精神的、理想的なる生活内容を對象と成す探求部門を、文化社會學、又主として衝動的現實的なる生活内容を對象と成す探求部門を「現實社會學」と呼んだのである。

「斯くの如き生活内容の兩極相への切離、又従つて社會學の二部門への峻別は、シェイラーに従へば、社會學の窮局目標に對する單に、方法的たるに止まらず、又實に「本體論的」なる假定である。而して今この假定に立つて逆に社會學の窮局にして獨自なる課題を視ふなれば、其れが社會的に規定せられた生活内容を、精神的衝動的また理想的現實的に制約する規定ベステインシングスフアクトゥレン要因の共力の仕方並に其の次序的連鎖オールドメンシングスフオルゲへの討究に在ることが知られ得よう。シェイラーは特にこの人間集團の一切の生活内容を決定する理想的、現實的なる社會學的要因の作用に於ける連鎖次序の法則に關する認識の裡に、單なる記述以上に出でた分類的にして因果的なる社會學の最高の目標を認めるのである。固より彼の謂ふ連鎖次序とは夫のコントが考へたやうな一回生起的なる人間歴史現象の事實的繼起を意味する時間的なる連鎖に關するものではない。斯る連鎖へ次序を求めたのは、コントの論理的に矛盾に充ちた哀しき妄想の戯れに過ぎぬ。従つてシェイラーの謂ふ連鎖次序の法則とは、種々なる集團又は文化の時間的生成に現はれる經濟權力、生殖、現實要因の三主要群の關係や形式に關する過程規則でもなければ、又其處に理想要因として現はれる宗

教、形而上學、科學、藝術、法律に關する過程規則でもなくして——是れ等現實的竝に理想的なる要因に關する記述の課題は、研究の前階として極めて重要であることは勿論であるが——是れ等の現實的竝に理想的なる要因の作用に於ける次序の法則であり、是れに基いて社會的、人間的、生活過程の歴史的又は時間的に繼起する一切の時ツァイトプンクト點に、集團生活内容の分割すべからざる全體が打ち建てられるのである。一言にして是れを蔽へば、連鎖次序の法則は、時間的なる連鎖に於いて完結せる既成ゲザオルテンハイト態の法則ではなくして、時間的なる作用の次序に於ける一切の既成態に就いて可能なる動的なる生成ワネルズンの法則である。(註一)

斯くして我等シェイラ教授が社會學を如何に解し、又其れに何を望んだのであるかを其の輪廓に於いて覗ひ知るを得るであらう。知の社會は、知なる人間文化の一作用が、事實的なる生活内容の全作用に於いて獲得する連鎖次序の法則を目標とする研究である。されば、是れを上來其の概要を述べ來たつたシェイラ教授の學說發展の様相に於いて見るなれば、教授自らの認識論的形而上學的作業の事實的出發根據であり、所謂作業世界アルバイトゥエルトに於ける知の現實的可能性の確立である。(註二)

シェイラー教授の社會學概念が單に純粹に社會學概念としてのみ理解せられるよりは、寧ろ教授の哲學論に於ける重要な一節若しくは其の基礎理論として理解せらるべきことは、我等が特に注意せねばならぬ。シェイラー社會學研究の指針たるであらう。

註一、本誌第二輯所載拙稿「社會學の一道標」一一八——一一九頁。是の一篇はシェイラー教授の「知の社會學」の序論を爲す「文化社會學の本質と概念」に關する譯述紹介を主題としたものである。

註二、シェイラー教授の「作業世界」の概念は、單に教授の社會學概念のみならず、「知識形式と社會」全篇を方法的に理解する上に極めて重要な概念である。いま教授の是れに關する敘述を「先驗的方法と心理學的方法」の卷末(七五及七六)から摘録すれば次の如くである。——

Die grundlegenden Begriffe der noologische Methode sind: Arbeitswelt und geistige Lebensformen.

Unter „Arbeitswelt“ verstehen wir die gemeinsam anerkannten Werkzusammenhänge der menschlichen Kultur. Sie ist kein an sich selbst evidenten Datum, sondern ein „wohlbegründetes Phänomen.“ Nicht nach der logischen Möglichkeit bestimmter Ergebnisse von wissenschaftlichen Einzeldisziplinen, resp. nach der Möglichkeit der vielschichtigen „Erfahrung“ ist zu fragen, sondern nach der realen Möglichkeit einer (Zunächst versuchsweise) umschriebenen Arbeitswelt.

第二篇の「認識と作業」は、第一篇に於いて獲得された認識の眞にプラグマティックな基礎理論の卓越性を、批判主義及び實證主義に對向させて展開し、世界形像の發展を新たな形而上學の意味に於いて把握せんとする最高の實在問題に對する嚴密に方法的な形而上學的研究の緒論である。されば、本篇は、夫の「先驗的方法と心理學的方法」に於いて出發した教授の認識論形而上學的方法論研究の一の清算であり、同時に、教授の純粹な形而上學への發展の第一步を劃するものである。洵にシェイラー教授の最終の感激は、生涯を通じて「人間に於ける永遠なるもの」を斯る到達し得る限りに於いて包括的窮局妥當なる知識形式に於いて、廣く時代に確固と示め、さうとするところに靜かく深く燃えつゞけてゐたのであらう。第三篇「大學と民衆大學」は、第一、二篇に於いて捕獲された結果の、獨國民教育の根本問題に對する實際的な適用であり、此處に我等は今述べた我が哲人最終の感激の火花を見る。其れは「宗教的再興」と共に將に爆發せんとする全光焰の最初の火花であり、戦後暗鬱なる生活の轉向に惱む獨逸國民の將來に有する得難く貴い探照燈の一つを成すものであらう。

\*  
\*\*

私は「知識形式と社會」全篇のグリンプスを語り終へた。しかし——讀者よ！今此處で私が突如として筆を擱いて此の紙面を去るとしたら、諸君は如何に感ぜられるであらうか。私の非禮を咎められる前に、諸君は必ずシェイラー哲學發展の爲め、若しくは其の猶ほ充たされざる多くの示唆多きプランの爲めに憤懣をすら禁じ得ないのでなからうか。既に述べられた未刊書のほか、現に教授の出版書肆 *Der Neue-Geist* 社近着の近刊豫告には猶ほ「形而上學」(*Metaphysik*)「哲學的アントロポロギヤ」(*Philosophische Anthropologie*)「歴史哲學の諸問題」(*Probleme der Gerichtspraxis*)「現代の哲學」(*Philosophie der Gegenwart*)等數種の書名が擧げられてゐる。然し今や私も亦諸君と共に憤懣を頌つて、この些やかな追憶の筆を抛たねばならぬ。一九二八年五月、マックス・シェイラー教授は猶ほ多くの春秋に富む五十五歳を一期として逝かれた。「知識形式と社會」は教授が生前公表された最後の著書となつたのである。

\*  
\*\*

私の追憶は、私の貧しい記憶を以てしても、猶ほあまりに性急に語られ過ぎた。死の知らせは、常に悪しき激情を我等に抱かしめる。其の背後にひそむ無限の緘黙は、我等に怖れをすら感ぜしめる。私は固よりこの一篇を以て、私の故教授を弔ふ微意をすら満足せしめようとは思はぬ。況んや此處に少しでも故教授の生涯と全功績を語つて世に問ふと云ふが如き野望は、其の自體樂しき課題であらうにも拘らず、今は私を腹立たしめる。古き世の聖<sup>ひじり</sup>を以て呼ばるる教父にも似て、全風貌に強力な意志を漲らした教授であつた。其の見開られた大いなる眼には、また鋭利な知見と繊細な情感との無限の交錯を湛えた教授であつた。其の嚴然たる教授の姿が、人々の生ける眼底から消え去つたことが、私には既に解き難き不思議であり、戦く悲哀である。此處に語られた追憶の断片は、在りし日の教授の一端をでも猶ほ生ける我等の生活につなぎとめようとする私の盲情の發露である。然しいまは在天の教授の靈は、恐らく讀者と共に斯る私の妄情を憫み笑はれるこ



とであらう。何故なれば、シェイラ教授の姿は、猶ほ惜みても餘りある大いなる成長の可能性を多々残したと云へ既に自身に於いて決して私の秃筆を借りたる程に消え易き存在ではないからである。

\*  
\*\*

「人間は一つの蘆 自然のうち最も脆きものに過ぎない

「しかし彼は考へる蘆である……(バスカル)

シェイラ教授は考へる人——ハンス・ドリイシュの言葉を藉りて云へばベルグソン、ラッセルと並らび稱せらるべき現代最大の哲學者であり、洵に「彼を殺す宇宙よりも遙かに貴い」人間であつた。教授が現世に残した「人間が人間を限りなく越える」可能性は、斷じて宇宙も是れを奪ふ能はず、永遠に我等人間の品位、我等人間を光榮として我等の上を照らすであらう。教授自らをして再び是れを云はしむるならば「眞の永遠は時を出でゆくものでもなければ、時と並らび立つものでもなく——時なき時に豊かなる内容を湛え又其れ等を以て時代々々の凡ゆる人々の視野を貫

くものである。

世々限りなく榮光 かれに在れ。